

ウィーン留学体験記

武方宏樹[✉]

琉球大学 理学部 海洋自然科学科生物系

私は、2015年4月からオーストリアのマックスFペルーツ研究所（MFPL）のTessmar-Raible Labに留学し、2年間をウィーンで過ごした。留学体験記ということなので、研究内容よりも、日常生活のを中心に書いていきたいと思う。私自身、留学前は学会誌の体験記を読み漁り、不安を払拭しようとした経験があるので、同じような境遇の方の一助になれば幸いだ。

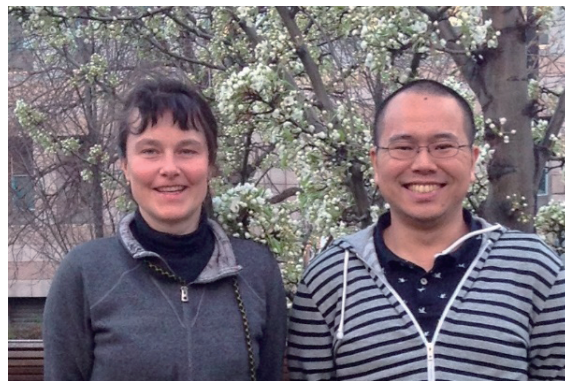
2014年3月、私はマングローブスズというコオロギの概潮汐時計についての研究で学位を取得し、将来について色々と考えていた。生物時計の研究を続けたいとは思っていたものの、あまり人がやっていないことをやりたいという思いと、概潮汐時計という個性的なテーマで学位を取ったという経緯から、概日時計以外の生物時計について研究しなかった。その考えを、恩師の一人である沼田英治先生に伝えたところ、イツツルヒゲゴカイの概月リズムの研究をしている、Kristin Tessmar-Raible先生を紹介していただいた。Kristinに日本学術振興会の海外特別研究員制度を使って研究室に参加したい旨をメールで伝えたところ、「旅費を出すので一度インタ

ビューを受けに来てはどうか？」という返事が来た。それから2週間後にはウィーンへ飛び、Kristinや他のポスドクとの面談を行った。当時の私は、英語がほとんど喋れなかったのだが、ラボのメンバーは学会発表で使ったスライドを使い、筆談も交えながら、やさしく研究内容やラボの様子について説明してくれた。一方の私は、終始おろおろしていただけだったので、研究室への参加を断られるのではないかと不安になった。すべての面談を終えた後、Kristinから「こちらは何も問題ないわ。日本のフェローシップに落ちた場合はオーストリアのものにも応募してみましょう。」と言ってもらえたことは、自分の実力からすると僥倖としか言いようがなかった。もちろん、英語はもっと勉強してくるよにと、釘は刺されたのだが。

その後、学振からの採用内定通知が届き、ウィーンへの渡航の準備を始めた。ウィーンはいわずと知れた音楽の都で、世界中から音楽家を目指す学生たちが集まってくる。そのため、海外留学生向けのドミトリーも充実しており、立地などに特にこだわりもなかったこともあって、簡単に住居を見つけるこ



留学先のマックスFペルーツ研究所



Kristinと筆者

✉hiroki.takekata@gmail.com

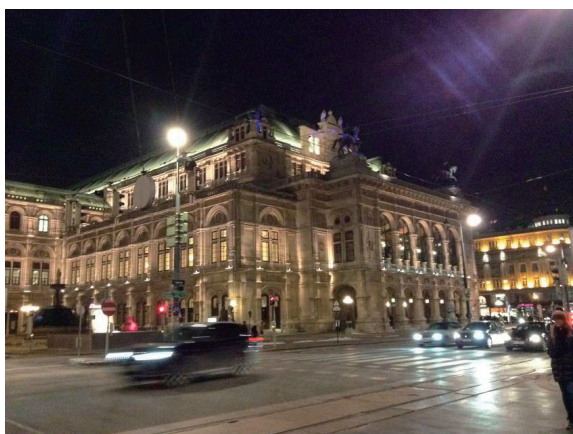
とができた。ただ、滞在許可申請には苦勞した。研究者や学生の場合は、“Student”や“Researcher”として申請でき、大学や研究所のサインがあれば簡単に手続きが終わるらしい。しかし、私の場合はMFPLと直接の雇用関係はなく、EU圏外からのフェローシップを利用しての留学だったため、“Special Cases of Gainful Employment”という少し特殊な申請をしなければならなかった。そのため、学振からの証明書や、保険や財産の証明等、多くの書類が必要だった。申請は渡航後に行うのだが、ほとんどの書類は国内で準備していかなければならず、書類によっては、発行日時に指定があったり、ドイツ語翻訳が必要だったり、かなり神経をすり減らした。また、申請の際に役所で「どうして“Researcher”で申請しないの?」と度々聞かれたのが、少々煩わしかった。“Researcher”の方が申請は簡単なので、優しさで指摘してくれていたのかもしれないが、担当者や窓口が変わるたびに説明しなければならなかったのには、さすがに辟易してしまった。幸い書類に不備はなく、滞在許可証は申請から1週間で受け取ることができた。ただ、手違いで私の名前が“Kiroki”になっていたのが、再発行してもらうことになったのだが、それには2か月かかった。

滞在許可証の申請と並行して、MFPLでの新しい研究生活が始まった。MFPLはウィーン大学とウィーン医科大学が共同出資する研究所で、Vienna Bio Center (VBC) とよばれるキャンパスの一角を占めており、周辺には主に分子生物学を研究対象とする複数の研究所が立地している。VBCから徒歩数分の距離には、モーツァルトも埋葬されたサンクト・マルクス墓地がある。これには、墓地近くにあった疫病の療養施設がVBCの源流となっ

たという歴史的背景がある。VBCの研究所間での交流は非常に盛んで、各研究所が別々の財源で成り立っているにもかかわらず、実験機器やセミナー室の貸し借りも気軽に行われていた。VBCが運営しているPh.D programもあり、各学生の学位審査のコミッティには、所属する研究所に関係なく、分野の近い研究者が選ばれるそう。

また、他の研究所で開かれているセミナーや懇親会にも自由に参加でき、そのような機会を通じて多くの若手研究者と知り合うことができた。留学当初は英語がうまく喋れなかったのだが、オーストリアの公用語はドイツ語ということもあって、周囲の人々は英語が喋れないことについて寛容だった。英語が喋れなくて申し訳なさそうにしていると、友人から「僕も日本語は喋れないから気にするなよ」と励まされたこともあった。このような環境は私にとって非常にありがたかったし、そのおかげで英語の上達も早まったのではないかと思う。余談だが、MFPLでは母体の大学の公用語がドイツ語なので施設案内はドイツ語表記だ。そのため、他の研究所から来た外国人研究者がMFPL内で迷子になっている姿をしばしば見かけた。裏を返せば、他の研究所は英語さえ覚えておけば問題なく生活できる環境なのだろう。

VBCには、オーストリア科学研究省とウィーン市も積極的に資金援助をしている。VBCで開催された国際シンポジウムのウェルカムディナーや、新築された研究棟のオープニングセレモニーに、オーストリア大統領やウィーン市長が挨拶に来るあたりから、国や市をあげて一大研究拠点を築き上げようとする気概が感じられた。このような背景もあって、VBCでは国外からの著名な研究者の招聘や学



ウィーン国立歌劇場



ウィーン国立歌劇場内の休憩室、オペラ幕間の風景

生の受け入れにも力をいれており、VBC全体で、約70か国からの研究者や学生が働いていた。日本人も、PIとポストドクを含め、十数人がVBCに所属していた。ちなみに、私と同じ年にオーストリアに派遣された海外特別研究員は全員VBCに来ていた (N = 2)。

Kristinはドイツ出身の女性研究者で、若くしてMFPLのGroup Leaderのポストを掴み、2児の母でもある。旦那さんのFlorian Raibleも同じくMFPLでGroup Leaderとして働いている。2人分の研究スペースを使い、実験機器も共有し、グループミーティングも一緒に行っているのだから、実質的には夫婦で1つの研究室を切り盛りしている状態だ。Kristinは非常にエネルギッシュな人で、度肝抜かれる出来事も多かった。私の留学中に3人目の子供が生まれたのだが、妊娠9か月にもかかわらず日本で開催される国際学会に参加しようとした(ドクターストップにより断念)、金曜日に出産し週明けのグループミーティングには赤ちゃんを抱えて参加したりと、見ているこちらが心配になるほどだった。このエピソードを紹介すると“女性研究者はこのくらい頑張らないと第一線を張れない”という誤解を招きそうなので、産休・育休をとるGroup LeaderがMFPLではほとんどであることを付け加えておきたい。

ウィーンでの生活は、総じて楽しかった。交通網もしっかり整備されていて、バスや路面電車などの公共交通機関を使えば、市内のたいい場所に行くことができた。研究所から路面電車で10-20分も行けば、“リンク”という主な観光スポットが集まっている環状大通りに出られた。旧市街は、街そのものが世界遺産に登録されるほど、歴史的な建造物や文化遺産が集まっており、ハプスブルグ家の栄華を象徴する街並みは、散歩するだけで満足できるほど風情に満ちていた。市内には、有名な音楽家に所縁の場所が散在しており、たまたま郊外に飲みにいったワイン酒場が、ベートーベンが『第九』を作曲したとされる家だった、という出来事もあった。食べ物に関しては、ヨーロッパならではの豊富な種類のチーズやワイン、豪快な肉料理など、日本には無いものを楽しめた。カフェにもウィーン独特の伝統があり、落ち着いた雰囲気の中でコーヒーを飲みながら食べるモーツァルトトルテというケーキは絶品だった。たまに日本食が恋しくなったときには、日本人ポストドクが集まって、ナッシュマルクトという食料品市場へ買い出しに行きホームパー



楽友協会前にて、はしゃぐ筆者

ティーを開いていた。日本食レストランもあるのだが、値段が高く、たまに行く程度だった。ウィーンでの生活で不便だったのは、ほとんどのお店が日曜日には閉まることだ。敬虔なカトリックの多いオーストリアでは日曜日は“休まなければならない”日で、営業しているスーパーも市内に3店舗しかない。そのうちの一つに一度だけ行って見たのだが、店全体で終わりのないタイムセールを行っているかのような乱雑さで、二度と行くことはなかった。

ウィーン国立歌劇場や楽友協会といった音楽の聖地もリンクに面していて、クラシック好きの友人は月に2、3回はオペラやコンサートに行っていた。研究室帰りにウィーン・フィルを聴きに行った、なんて話ができるのもウィーンならではのだろう(ウィーン・フィルのチケットをとるのは、現地でも至難の業だが)。私は、別段クラシック好きというわけではなかったのだが、実際に聴きにしてみると、コンサートそのものも楽しめたし、建物の醸し出す伝統的な雰囲気には圧倒された。世代を越えて長く愛されるものには、素人をも引き付ける魅力があるものなのだと感じた。初めて楽友協会に行った際は、どのような服装でいくのか悩んだが、実際に行ってみると、カジュアルフォーマルといった服装の人が多く、かっちりスーツを着込んできているのはアジアから来た旅行者ぐらいだった。コンサート後の人々の雰囲気は、映画館から出てきた人のそれとよ

く似ていて、地元の人たちにとって、クラシックコンサートは日常の一部なのだと感じた。チケットの値段は席や演目、演奏者にもよるのだが、楽友協会のコンサートは50ユーロ、オペラは120ユーロで、それなりに良い席がとれる。立ち見でよければ4-6ユーロで買えるので、ウィーンに行く機会があれば、ぜひ立ち寄ってみることをお勧めする。

このように、私のウィーンでの2年間は公私ともに非常に充実したものであった。留学前は、英語も喋れないのに留学なんかして生きていけるのか、と思っていたものだが、行ってみれば何とかなるものである。私のように留学前で不安に感じている人がいたら、思い切って旅立ってほしい。海外留学する機会が得られている時点で、それなりの研究のスキル等は身につけているはずなので、自信を持ってもらいたい。最後に、留学の機会を与えていただいた日本学術振興会と、留学体験記執筆の機会を与えてくださった編集委員の池上啓介先生に、心よりお礼申し上げます。